

積極型の子ども・消極型の子ども — 子どもの自立をめぐる —

萩 昌子（大阪）

『研究報告集 90』、堺市立教育研究所、1991、P57 - 65 より転載

要旨

キーワード：

はじめに

教育相談で出会う子どもたちの行動を見ていると、大きく分けて、積極型（教師への反抗、友だちとのけんか、非行）と消極型（神経質、緘黙、登校拒否、等）のふたつのタイプに分けられるように思います。

各々のタイプの特徴を説明し、教育相談の中での対応を事例を紹介しながら報告します。先生方が子どもたちへの対応をお考えになる時に、参考にさせていただければうれしく思います。

1、依存から自立へ

人間の子どもは生まれた時には自分で歩くこともできず、大人に保護されなければ生きていけない状態です。それが成人したときには当然のことながら自立していることが期待されます。つまり、100%保護されないと生きていけない状況から、社会人として自立し、さらには他人を保護する立場に変わらなければならないわけです。これはある日突然できるようになるのではなく、多くの体験的な学習を積むことによって獲得していかなければならないことです。

このような依存から自立への成長の過程において、子どもはさまざまな課題に出会います。そして、成長するにつれて、それらの課題を大人（親や教師）の援助なしに、自分で対処できるようになっていかなければなりません。

* 年齢が高くなるにつれて、親が援助できない課題がふえてくる。

子どもが幼い間は、子どもが困っていると親が手助けしてあげられることが多くあります。

例えば、幼児が退屈そうにしている時、親が絵本を読んであげたりして、子どもと楽しい時間を過ごすことができます。

あるいは、友だちがいない子どもの場合、小学校低学年であれば、親同士が親しく、子ども連れで遊びに行く機会が多いと、それがきっかけで、子ども同士も仲良くなることがあるでしょう。あるいは、自分から友だちに近づかないので孤立しがちな子どもがいると、担任がクラスのリーダー的なグループにその子を入れるように配慮することによって、その子も仲間に入れてもらえ

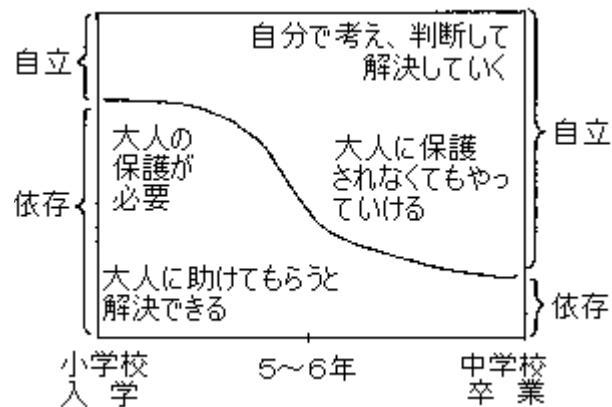
るというような場合もありえます。

けれども、子どもの年齢が高くなるにつれて、子どもが困っていても、親が援助できることは少なくなります。つまり、子どもが自分で処理していかなければならない課題が増えていくのです。

例えば、中学生が退屈そうにしている、親が子どもの退屈をまぎらわせてあげるといことはできません。また、友だちがいない中学生にたいして、親が友だちになってくれそうな人を連れてくることもできません。子どもがどのような進路選択をするかについても、大人は自分たちが持っている情報や意見を子どもに伝えることはできても、子どもの代わりに進路を決定することはできません。

※小学5、6年生頃から中学校にかけて、急激に自立・依存度ラインが変化する。

このような依存と自立のバランスは、小学校の5、6年生頃を境目にして急激に変化します。大まかに図表化すれば、(図1)のようになります。



〈図1〉

次に、子どものタイプを積極型と消極型の2つのタイプに分けて考えてみたいと思います。

ここでは、

積極型＝自力解決タイプ

消極型＝保護欲求タイプ としてみます。

2、積極型＝自力解決タイプ

〈このタイプの子どもの特徴〉

* 自分でやってみたい

積極型の子どもは、何か困ったと感じることがあると、積極的に行動をとり、自力で解決しようとするように見えます。本人の主張と周囲の期待がくい違い、摩擦を起こすことがあっても、なお、自分がやりたいと思うことを実行しようとしています。

刺激的なことやおもしろいこと、目立つことが好きで、単調さや退屈を嫌います。

* 積極型の子どもを大人が保護しつづけようとする、

積極型の子どもは、大人の力を借りないで自分で課題に挑戦していきたいと思います。自分でやってみたいと思う子どもに対して、大人が、子どもが期待している以上に、子どもを保護してやらねばと思ったり、大人が良いと判断したことを子どもに強要しようとする、子どもは大人に反発してきます。

大人から見れば、子どもによかれと思っているのに、その通りにしないので、子どもが反抗的(生意気)だと感じます。子どもが自分の言う通りにしないと、怒りを感じる人が多いようです。

子どもは、「大人に言われたようにではなく、自分の判断でやりたい。もっと信頼してくれたらいいのに」と思います。子どもの側からみれば、大人が自分の力を信頼せず、邪魔しようとすると感じ、子どもの方も大人に腹を立てます。

大人の保護なしでは暮らしていけないと子どもが感じている間は、大人が怒ると、子どもは大人に従います。けれども、子どもが中学生にもなれば、大人が怒ることは幼い頃のように恐ろしい事態ではなくなります。それだけ、子どもは成長してきて、生活力もついてきているのです。

大人が「保護してやらないぞ」という強硬策に出たとしても、もはや、以前ほどの効き目は期待できません。

例えはよくないですが、中学生にもなれば、家出して、仕事を見つけてしばらくは自活することができるともいえるほどです。

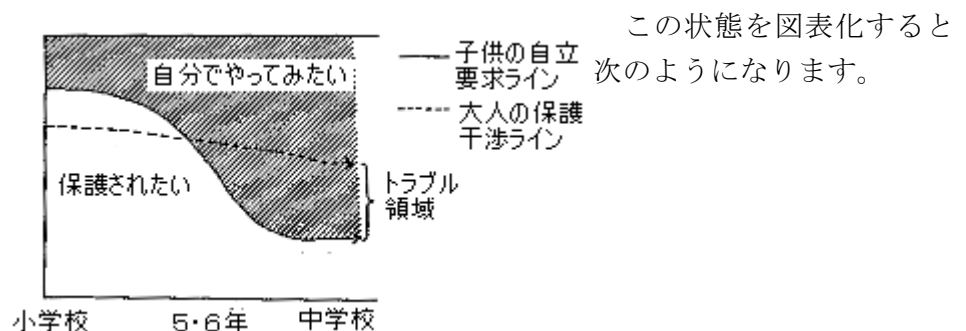
* もはや、力づくでは従えられない

このような関係が続くと、子どもは自立へのエネルギーを大人と争うことに使い始めます。大人の言いなりにならないこと、大人の期待に反する行動をとることが、自分の力を証明することになると思うようになります。

子どもの成長に伴って、子どもの課題は大人が援助できないものになっていきますし、子どももそれを自分でやっとうとするようになります。大人が手助けできない課題を子どもが自分でやってみようとしている時に、大人がなお手助けしようとするところにトラブルが生じてきます。

中学生になると、急激に問題行動が増加するのは、子どもから大人への期待と大人から子どもへの期待の不一致のためであると考えられます。

大人が子どもを支配しようとするほど、子どもとの力争いになり、問題行動も扱いにくくなっていきます。



〈図2〉

〈積極型の子どもの相談例〉

事例1：外泊する女子中学2年生

母親は、娘のBさんが「外泊して家へ帰ってこようとしない。友だちのところにいるらしいので、探し出して連れ戻すと、今度は友だちと一緒に家出してしまう。服装違反で登校するし、勉強はしない。いくら叱っても言っても聞かせても効果がない。どうしたらいいか」ということで相談に来られました。

Co：「家に帰ってほしいのなら、家の居心地をよくすればいいのです。本人は何がいやで家に帰りたくないと言ってますか？」

母：「口うるさい、細かいことを注意するからと言ってます」

Co：「では、それをやめましょう」

母：「でも、勉強させないと高校にも行けないし、服装違反して登校したら先生に叱られるし…。親としては、やっぱり…」

Co：「今までお母さんが、彼女に勉強をさせようとするとう勉強するようになりましたか？あるいは、服装違反を注意すると彼女はやめましたか？」

母：「いいえ、逆で、よけい勉強しなくなります。家にも帰ってこなくなるし…」

Co：「では、今までしていたことは彼女には逆効果のようですからやめましょう。それに、勉強するのは子どもの課題ですし、自分の努力と能力に見合った進路を選択するのは子どもの責任です。彼女に勉強してもらって、お母さんがもう一度高校へ行くわけではないですよ」

母：「ええ。では、試してみます」

…1ヶ月後

母：「いやがることを言わないようにしたら、この頃は、家出もせず、家に帰って来る日が多くなってきました。自分から帰ってきた日は、連れ戻していた時期と比べると、少し穏やかな様子です。ただ、いつ帰って来るのかわからないし、夜遅いのと鍵をかけられないので、私はゆっくり眠れないんです…」

Co：「勉強のことは彼女の課題だし、やらない結末は彼女にしか起こらないので、彼女に任せる事柄です。でも、Bさんがいつ帰って来るかわからなくて、そのため夜の戸締りをできないで困ることについては、お母さんに迷惑がかかっているのだから、彼女にもなんとかしてもらえないかお願いできる事柄です。今日は帰るのか帰らないのか、どこに泊まるのかを連絡してほしいとお願いしてみてください。彼女を力づくで連れ戻そうとしないことが彼女に理解してもらえていれば、泊まり先を知らせてくれるでしょう。」

母：「それでも連絡をくれない場合はどうしたらいいのでしょうか？」

Co：「彼女の行為が他の人への迷惑になっているのですが、連絡をしないとすれば、他にどんな責任の取り方ができるでしょうね？」

母：「そうですねえ。私が寝る時間には鍵をかけてしまいたいのですが、帰ってきて入れないとかわいそうかと…」

Co：「家で寝たいのなら、今日は帰るから閉めないでほしいと連絡をいれるか、鍵を持ってでかけるようにするというのがBさんの責任でしょう。」

母：「子どもがかわいそうというのは、実は子どもを無責任にしているのですね」

Co：「勉強しないと困るのは子ども自身なのに、親が必死になって勉強させようとしていると、子どもは反発して、自分が勉強しないと親が困ると勘違いします。一方、親が迷惑を受けても容認していると、子どもは自分が他の人にどのような責任をとらなければいけないのかを考えませんね。子どもに任せるべき課題を子どもに任せないで親子が力争している間は、子ども

も他人の迷惑について考えようとはしてくれませんよ」

このような方針で、家庭内のその他の問題を整理しながら相談を進めます。

Bさんの場合は、半年後には、帰宅時間については問題がなくなり、家族ともなごやかに話すようになりました。そのうち、家庭教師に来てもらって勉強をするようにもなりました。

事例2：学習しない男子中学3年生

「学校で先生に逆らって、授業妨害をするし、親の言うこともまったく聞かない。勉強しないので腹が立ってしかたがない」とSくんの母親が相談に来ました。

子どもの課題を子どもに任せるように相談を進めると親子のトラブルは減っていききました。

ある日、Sくんが母親と一緒に相談にやってきました。

Co：「よく来てくださったわね。どんなことを相談なさいたいのかな？」

S：「学校へ行きたくない。先生がうっとおしい」

Co：「じゃ、先生とどのようにつきあえば学校へ行きやすくなるかを相談したいということね。それで、どんな時にうっとおしいなって思うの？」

S：「しんどくて勉強したくないとき、保健室に行ったら、教室へ帰れと先生が連れ戻しに来るんや」

Co：「で、どうするの？」

S：「先生が引っぱっても動かんとかがんばったら先生があきらめるけど、3回目くらいには強く引っぱられるので、しゃあなしに戻るんや、けど、いややなあ…と思うんや。仮病やろとかさぼってるんやとか言われるし」

Co：「どんな様子なのか、ちょっと実際にやってみてよ。私が先生の役してみるから、Sくんが学校でやってるみたいにやってよ」（ということで、ロール・プレイをする）

Co：「あなたが一番先生に言いたいことはどんなことなの？」

S：「勉強せんで困るのは自分やから、ほっといてほしいんや。授業に行くときは自分で行くから、無理に連れていかれても、勉強する気になれへん」

Co：「さっき、やってみたときにはそういうことは言ってなかったよ」

S：「言うても聞いてくれへん。今までも言うたことあるけど…」

Co：「Sくんの今の考えを堂々と先生に言ってみる練習しない？ そして、あなたが先生にどうしてほしいか、お願いしてみるのよ」

S：「どういうふうに言うたらええのん？」

Co：「だから、勉強しないで困るのはぼくやから、ぼくのしたいようにさせてほしい。もう少し、保健室におらせてくださいとはっきりと丁寧に言ってみるのはどうかな？ さあ、もう一度、さっきの場面を台本を変えてやってみよう」（ロール・プレイ）

Co：「じゃ、今度は私がSくんの役をするから、あなたが先生の役をしてみて。始めにやったのと、今のと両方してみよう」（ロール・プレイ）

Co：「じゃ、学校で機会があれば、今日練習したのを試してみてね。先生にあなたの言いたいことがわかってもらえるかもよ」

…その後、母親から聞いた話。

母：「勉強しないでいるのを先生に注意された時に、自分の考えを言ったらいいんです。そした

ら、先生が『わかった。おまえを一人前の大人として扱えと言うことやな。勉強のことはおまえにまかせんやな』と言われたそうです」

Co:「試してみてくださいたんやね。先生も彼の考えを聞いてくれたんですね」

母:「あれから、しばらく経ちますけど、この頃、先生がいやだとは言わなくなりました。学校へも行ってます。あんなに先生の事、いやがってたのに、この頃は『あの先生、結構いい話してくれる』なんて言うんですよ、生意気に。先生も『ぼくはこう思うな』とはおっしゃるんだそうですけど、『だから～～しろ!』と言うのはやめられたみたいです」

Co:「先生も、言い方ひとつで、生徒から嫌われたり好かれたり、たいへんですね」

母:「親もいい勉強しました。私の思うようにはなかなか勉強しませんが、私が口うるさく言っていた頃よりも、本人なりにはやってるようですわ」

〈対応の基本方針〉

積極型の子どもの場合、大人が子どもの自力でやろうとしている部分に干渉するのをやめると、多くの場合、子どもとの関係は改善します。

大人の干渉がなくなると、しばらくは、自分の好きなことをして過ごすでしょう。その中には大人からみて好ましいと思えることばかりではないかもしれません。けれども、そのような場合にも、こちらに迷惑のかかっている部分についてのみ、子どもに行動の調整を頼むようにします、関係が改善していれば、けっこう子どもの方でも気をつけてくれることが多くなります。

そうして、周囲の人々とうまく暮らせるようになれば、それは子どもたちの自信を回復することにもつながります。ここまでやっておけば、子どもが本当に困ったと思う時には、大人に相談してくるでしょう。その時には、「だから勉強しろといったやろ!」などと過去の失敗を指摘することは禁物です。子どもはすでに体験から学んでいるのですから。今からできることはどんなことがあるかを冷静に子どもと話し合い、子どもに選択してもらうようにします、

積極型の子どもの場合、それまでのこじれ具合によっては個人差はありますが、おおむねこのような経過をたどって、子どもは自立に向かって成長していきます。

* 対応を変えた場所では、子どもとの関係は変化する。

子どもが問題行動を起こす原因は家庭にあるとか、親子関係に問題があるためだという考え方が世間には根強くあります。確かに、保護者が相談に来られて、子どもへの対応を変えられると、家庭の状況は改善します。けれども、先生と生徒の間にも、(図2)のような重なり部分がある構造では、先生と生徒の関係はよくなりません。

3、消極型＝保護欲求タイプ

〈このタイプの子どもの特徴〉

* 自分ではできない。

消極型の子どもは、何か困ったと感じることがあると、他者からの援助を引き出そうとします。大人はいつも自分を保護してくれるものだとして期待しています。

自分の力では何もやれないと感じていて、「自分は能力がない、自分の力ではうまくやれそうにない」というような低い自己評価をしています。

保護されていること、安全であること、予測がついていることを望み、恥をかいたり、失敗しそうなことに手を出すことを嫌います。

また、周囲から援助を引き出すためには、援助者と対立する関係になってはまずいので、表面だった対立関係に入らないように気をくばります。

* 援助を引き出す作戦

このタイプの子どもたちは、積極型の子どもとは違ってあからさまなトラブルを起こしません。

「私が面倒を見てあげなければ、この子は一人ではなにもできない」と大人に思わせるのが上手です。そうしていれば、誰かがなんとかしてくれるからです。

小学校の間は、担任に保護される存在でいようとしています。実際、小学校では、担任の援助によって助けることができる場面があります。

担任からの保護を得るための作戦のひとつは、教師の期待を裏切らないよう行動することです。はめをはずしたりせず、教師から言われたことはきちんとしようとしています。

もうひとつの作戦は、無力な子でいることです。例えば、友だちに言い返したり、言い争ったりできる子どもに対しては、教師はその子を常に友だちからかばってあげなければと思わないでしょう、そこで、消極的な子どもは、他者から攻撃されることがあっても、それに対して自力では対応できないようにふるまいます。そうすれば、大人は攻撃から自分を守ってくれるか、攻撃した相手を罰してくれたりするからです。自分の力でやるよりも、大人に助けてもらう方がうまくいくと考えます。

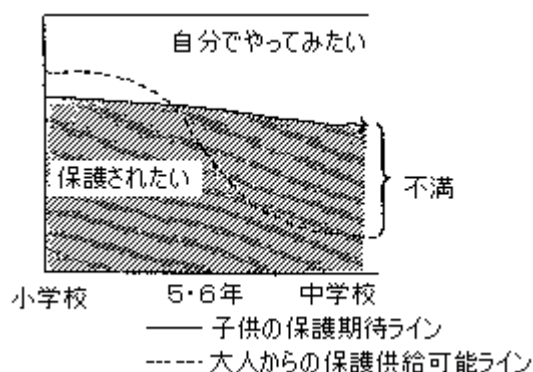
* 子どもが成長すると援助を供給しつづけることができなくなる

小学校の間は、子どもが困ったときに担任や親が手助けできることもありますが、子どもの年齢が高くなるにつれて、大人が手伝ってあげられない問題に子どもは出会うようになります。

けれども、子どもは、困ったときは大人が何とかしてくれるものと思っていますので、年齢が高くなっても、その期待を持ち続けます、大人の方でも、なんとか子どもの困難を助けてあげなければいけないと思いつづけます。それにもかかわらず、大人には手助けできない課題が多くなり、大人は子どもの期待を満たしきれなくなります。

大人の助けが来ないと、子どもは困難な事態から身を引いてしまったり、あるいは、自分を助けてくれない大人に腹を立てたり、あるいは、いらだいたり落ち込んだりして自分が困っていることを周囲にさらにアピールしようとすることもあります。

先生からみれば、このタイプの子どもが学校に登校している時には、気になる子どもであるかもしれませんが、それほど問題を抱えているとは見えないと思います。ある日・突然・子どもが学校を休み始めたりして・はじめて先生が気づかれるというようなことが多いでしょう。この状態を図表化すると次のようになります。



〈図3〉

〈消極型の子どもの相談例〉

事例3：転校後、学校に行けなくなった女子中学2年生

Fさんは、「前の学校と勉強の進度が違うの。教室移動の時に、誰も教えてくれないから、どこへ行けばいいのかわからなかった…」と言って、転校後、登校できなくなりました。「どうしたらいい？」と親を見ては泣いて訴えます。

母親も、初めのうちは、子どもがかわいそうだと思い、なぐさめたり、本人の気持ちを聞いてあげて、なんとか力になろうといろいろ対策を言うてみるのですが、本人は「できない…、どうしたらいいの…」と嘆くばかりです。親にはなすすべもなく、かまわないでいると、Fさんはわざわざ居間まで出てきて、家族の前でため息をついたり、泣いたりします。

相談に来られた母親は、「今までどうしたらいい、こうしたらいいと言ってきたんですけど。…中学生の娘になんとかしてと言われてもねえ…」と話されました。

母親もついに疲れはてて、「学校へ行けなくて悩むんだったら、行くしかないでしょう。行かないなら、行かないなりに生き方を考えたらいいのだし」と子どもに言って、彼女が感情的になっても取り合わないことに方針を切り替えられました。

泣いてみせても母親が助けてくれそうにないと諦めたFさんは、少しずつ登校することにしたようです。

しぶしぶながら登校してきたFさんを迎えた担任の先生は、「教室に入りにくかったら、相談室があるから、そこで勉強してもかまわない」と言いました。彼女はそこで少しずつ勉強することになりました。

しかし、担任の先生はFさんがはっきりと自分の意志を表明しないので困られました。困ると、目を潤ませて泣きだしそうになるのですが、それだけでは、Fさんが何をどう困っていて、どうしようと思っているのか担任にはわかりません。

先生はできるだけ情報を彼女に与え、行動の選択は本人がするように根気よく働きかけました。

例えば、相談室をいつも彼女の専用にしておくわけにはいかないという問題があります。相談室を使えない場合、教室に行くか、それとも、他に彼女が使わせてもらえる場所（例えば、保健室、印刷室等）のどこかに行くか、使えない日は休むかを彼女の判断に任せました。

ある日、クラスの女の子たちが、相談室に行ってFさんに会いたいと担任に言いました。先生は、Fさんにとっていい時期かどうかを迷いましたが、これも本人の意見を聞くのが一番確実だと考え、「〇〇さんたちがここへ来たいと言ってるが、どうかな？」と尋ねました。FさんがOKの返事をしたので、クラスの友だちが相談室に出入りするようになりました。

しばらくして、友だちがFさんに「教室に行こう」と少し強引に誘ったことがありました。Fさんがいやがっているようなので、担任は止めに入ろうかなと一瞬迷いましたが、その場は子どもたちに任せることにしました。

子どもたち同士の関係は、教師がいつも生徒の間に入って調整できることではないからです。

それから1ヵ月程して、Fさんは教室へ入るようになり、友だちとも仲良くなりました。

ポイント

- * 親や教師が、援助できること・できないことを区別する。
- * 教師は情報を提供し、子どもが自分なりにやっていくことを認める。
- * 子どものそぶりからその子の要求を察して対応しない。

事例4：小学校から学校に行きにくかった男子中学生

Gくんは小学校の頃から学校を休みがちでした。「4年生頃、給食のおかずに定規を入れられた」というような楽しくない思い出をもっています。5、6年の担任の先生が熱心に家庭訪問をし、登校の働きかけをしたので、卒業前には登校する日が増えていたそうです。

けれども、中学校になると、1学期も終わらないうちに登校しなくなりました。たまたまに登校すると、体格の大きな友だちの後ろに隠れるようにしているということでした。

中学校になって、親は相談に見えられました。「周りのものが引っ張って登校できるのではなく、自分で行けるようになってほしい、無理に行かせても持続しないから」というのがその頃の親の彼への期待でした。

学校へ行けないいらいだちのためか、弟たちをいじめたり、母親に暴力をふるう時期もありました。

この時期には、筆者は家族全員に来所してもらうことを提案し、家庭内のトラブルの解決を話し合いました。この時、筆者が初めて会ったGくんは、体格は小柄で、下を向いて小声でしゃべる自信のなさそうな子どもでした。

2年生の秋・当研究所で取り組んでいる不登校生徒のグループ活動に呼びかけると、参加してくれるようになりました。

ほとんど登校しないまま3年生になる頃には、両親もGくんに学校へ行ってもらいたいという思いを離れて、彼のこれからの人生を応援しようと考えようになりました。親がそのような考えるようになった頃から、Gくんは元気が出てきて、家族ともよく話をするようになりました。

Gくんと両親の3人で相談に来ていた時、父親が「学校に行っていないからといって小さくなることはない。悪いことをしているわけでもないんやから。なんでもええ、自分がやれると思うことやったらええんや、堂々と生きることが大切や」と言葉にして本人に言われたのです。それを聞いたGくんは、とてもうれしそうにうなずいていました。

その後、冬休みに知人の会社にアルバイトに行ってみることにになり、Gくんは朝から電車に乗って仕事に通いました。約束の期間中、仕事をやり遂げて、彼はとても自信をつけたようでした。きっと、彼なりの進路を見つけていくことでしょう。

ポイント

* できていないところを探して、「もっと～～になりなさい」と子どもに期待をかけるのをやめる。

これは、「今のあなたのままではだめだ」というメッセージと同じこと。自分の力でやれそうにないと思っている子どもをより自信をなくさせる。

* 登校拒否しながらも元気に暮らしている子どものグループへの参加を呼びかけたり学校に行かなかった子どもの進路など、情報提供をする。

〈対応の基本方針〉

消極型の子どもを援助するのは、容易なことではありません。

子どもがどの程度、他者の援助を期待しているか、自分の力ではやれない（「自分はだめな子だ」）と感じているかによって、対応を工夫しなければなりません。

第1に気をつけたいことは、子どものできていないところを指摘しないようにすることです。

大人はついつい、自信を失っている子どもに「もっと、元気になれ」とか、「もっと、誰とでも遊ばなくてはいけない」とか、「もっと、話をしなさい」、「もっと～、もう少し～するようにならなければいけない」と際限なく子どもに期待を押しつけがちです。

このような姿勢は子どもの自信を高めません。次には、大人が助けてあげられないこともあることを大人自身が理解しなければいけません。

その上で、子どもに情報を提供し、行動の選択は子どもに任せ、子どもなりにやろうとすることを決して批判せず、応援することが必要です。子どもが自信を失っていればいるほど、子どもなりの判断や現状を肯定的に見守る姿勢が必要です。

おわりに

今回は、積極型と消極型に分けて、教育相談で出会う子どもたちの事例を通して、各々の子どもたちへの対応を紹介しました。

先生が担任された子どもの対応に困られたら、まず、その子がどちらのタイプであるかを見分けてください。

積極型だとわかれば、子どもが望んでいない援助をしようとしていないかを考えてみてください。

消極型だとわかれば、大人が援助できない課題を教師の力で解決してあげなければと考えていないか、あるいは、実際にはできもしない援助を子どもに約束したりしていないか考えてみてください。

人にはそれぞれに特質があります。例えば、いつも旅行の企画をして友だちを呼び集めるのが得意な人もいれば、誘ってもらうと喜んで参加する人もいますし、さらには留守番しているのが好きな人がいるでしょう。自分の特質を活かして、協力的に生活したり、仕事をするのが大切ではないでしょうか。

積極的な子どもは積極的な子どもとして、消極的な子どもは消極的な子どもとして、それぞれに建設的な居場所があればいいのです。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載